



Title	「も」の多様性に関する統語論的研究
Author(s)	榎原, 実香
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/72214">https://doi.org/10.18910/72214</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 榎 原 実 香 )	
論文題名	「も」の多様性に関する統語論的研究
論文内容の要旨	
<p>本論文は、以下のように多様な用法をもつ日本語の「も」を統語論的な観点から体系化することを目的とする。</p> <p>(1) 太郎も試験に落ちた。(累加の「も」)</p> <p>(2) 東大生も試験に落ちた。(意外の「も」)</p> <p>(3) 3人も試験に落ちた。(数量表現+「も」)</p> <p>(4) どの学生も試験に落ちた。(不定語+「も」)</p> <p>(5) 太郎も試験に落ちるかあ。(ぼかしの「も」)</p> <p>第1章では、日本語学における先行研究を概観し、「も」の分類を「も」の特性である累加性から整理している。(1)のような累加の「も」や(2)のような意外の「も」には、文中のある要素をとりたて同類のほかのものを想定するという、現代日本語の「も」の基本的な機能が顕著に現れていることから、累加の「も」として一括して扱う。(3)、(4)のような極限の「も」は、とりたてた語の下位集合や数量のスケールを想定し、極限值にあることを示すことから、累加の「も」とは区別し、極限の「も」として扱う。また、(5)のようなぼかしの「も」は、具体的な同類の事物が想定されない点が累加の「も」とは異なる。ぼかしの「も」を、「南も南」といった典型例を表示する(ア)の「も」、「夏も終わり」といった時の移り変わりにかかわる(イ)の「も」、「お前も大人になったな」といった一般則や別の解釈を想定する(ウ)の「も」の三種に分類する。</p> <p>第2章では、生成文法における先行研究を中心に概観し、本稿における理論的立場を明らかにしている。沼田(2009)は、とりたて詞の統語論的特徴に関して次のような特徴を挙げている。</p> <p>(6) (i) 分布の自由性 (ii) 任意性(消去可能性) (iii) 連体文内性 (iv) 非名詞性</p> <p>しかし、(3)のような数量の大小を強調する「も」は普通名詞に、(5)ぼかしの「も」は目的語の名詞に付加できず、(i)分布の自由性が満たされない。また、(4)のような不定語と共起する「も」は削除が容認されない場合があることから、(ii)任意性をもたない。さらに、(5)のようなぼかしの「も」は連体文の中に生起されないことから、(iii)連体文内性が見られない。ゆえに、「も」の周辺的な用法にはとりたて詞の統語論的特徴が適用されない。本論文では、付加対象、生起する階層、一致(削除)の観点から「も」に関する議論を進める。</p> <p>第3章では、「も」の付加対象、「も」の生起する階層について用法ごとに提案している。「も」が付加する対象に関して、個別のテストから属格の「の」の直前に生起される不定語+「も」、数量表現+「も」、(ア)のぼかしの「も」が主要部に付加することを提案する。さらに、属格の「の」の直前に生起されない累加の「も」、(イ)のぼかしの「も」、(ウ)のぼかしの「も」が最大投射に付加することを提案する。</p> <p>次に、南(1974, 1993)やカートグラフィーによる分裂CP仮説を援用し、各「も」がどの階層に生起される要素であるかを検討する。不定語+「も」、数量表現+「も」、累加の「も」は、A類従属節内に生起できることから、vP内(Aの階層)に生起することを示す。また、ぼかしの「も」に関しては、(ア)の「も」はvP内、(イ)の「も」はFinP内指定部、(ウ)の「も」はForceP内指定部に生起する「も」であることを示す。</p> <p>第4章では、一致の観点から、各「も」と他の要素との関係を明らかにしている。本論文では、項削除、助詞残留において削除された要素に対し、LFコピー分析を援用する。(4)のような不定語と結びつく「も」を想定した場合、「も」と不定語の一方のみの削除が許されないため、[Q]素性の一致が生じていると考えられる。一方、累加の「も」やぼかしの「も」の付加対象のみが削除される助詞残留は問題とならないため、累加の「も」やぼかしの「も」には、[Q]素性の一致は生じていないと考えられる。「も」が不定語と一致する[Q]素性をもつとすれば、不定語と「も」と「か」が共起した場合、不定語と結びつき全称を表す「も」として解釈すると、不定語と主要部に位置する「も」との素性</p>	

照合が生じ、照合相手のない「か」によってYes/No疑問文となることが説明され、「も」が主要部に直接付加する構造が支持される。それに対し、累加の「も」は不定語と素性照合が生じない最大投射の付加位置にあるために、不定語が疑問を表す「か」と結びつきWh疑問文となることが説明される。「も」のもつ素性に関しては、青柳（2006）やTomiooka（2007）によって累加の「も」が[+FOCUS]素性をもつことが述べられているが、本論文では、統語構造をVallduví（1992, 1994）による情報構造と対応させ、FOCUSの階層（～FinP）、LINKの階層（FinP～）を設定する。情報構成にかかわる[+FOCUS/+LINK]素性の一致が各階層で生じるとすると、累加の「も」はFOCUSの階層においてとりたて対象となる要素と[+FOCUS]素性の一致が生じることが考えられる。また、時にかかわる（イ）のぼかしの「も」は人称を限定する表現と結びつかないことから、TPにおいて[+FOCUS]素性の指定部・主要部の一致が生じ、（ウ）のぼかしの「も」は疑問、勧誘、行為要求など、聞き手との情報格差を前提とする文末形式とは共起が難しいことから、ForcePにおいて[+LINK]素性の指定部・主要部の一致が生じる。

第5章では、「も」の用法の違いを「も」による作用域の違いによるものであるとし、各「も」の用法を統語論に結びつけている。第3章、第4章にて論じた各「も」の生起位置、「も」と他の要素との[Q]素性の一致、[+FOCUS/+LINK]素性の一致によって意味作用の及ぶ作用域が定まると考え、「も」による作用域を各「も」の統語論的特徴から説明している。累加の「も」は最大投射に付加し、「も」をもつ句の作用域内の要素と[+FOCUS]素性の照合が生じることで任意的に焦点が拡張する。また、不定語や数量表現と共起する「も」は主要部に付加し、「も」の付加対象を主要部とする句の中で[+FOCUS]素性の照合が生じるため、作用域は他の範疇へと及ばず焦点が拡張しない。A類に属する（ア）のぼかしの「も」も主要部に付加すると考えられ、その投射内において[+FOCUS]素性の一致が生じるため、「も」によって付加対象の「典型例」など下位集合が想定される。B類に属する（イ）のぼかしの「も」は、TPにおいて[+FOCUS]素性の一致が生じるため、B類従属節内に焦点の拡張が生じ、「も」によって時の移り変わりを表現することができる。C類に属する（ウ）のぼかしの「も」は、ForcePにおける[+LINK]素性の一致により、文全体への焦点の拡張が義務的に生じ、一般則や別の解釈を想定するはたらきをもつ。このように、「も」の付加対象や「も」をもつ句が生起する階層から素性の照合対象が定まり、素性照合によって「も」の累加性の及ぶ範囲が決定して、それが語用論の段階で計算対象となる。

第6章では、C類ぼかしの「も」をもつ句と文末形式との呼応から、否定辞と結びつく「誰も／何も」などの否定呼応表現（NCI）が情報構成にかかわる素性の一致現象であるとし、両者を統一的に分析している。C類ぼかしの「も」と否定呼応表現における「も」は、以下の三点において共通する特徴が見られる。まず、どちらの「も」も、比較的自由に付加対象を選ぶことができる。次に、「誰も／何も」はNegP、C類ぼかしの「も」をもつ句はForcePという限られた階層において主要部との呼応を要する。最後に、どちらも「が」を付加させると、特定の機能が現れなくなる。また、否定呼応表現は、否定辞が「も」をもつ句を残して削除されるため、NegPにおいては[+FOCUS]素性の一致が生じていると考えられる。ただし、先に「誰」や「何」といった不定語と併合し、[Q]素性の一致が生じているため、否定呼応表現として用いられる「も」の焦点は拡張しない。よって、否定呼応表現における「も」は、不定語との[Q]素性の一致と否定辞との[+FOCUS]素性の一致がどちらも生じる現象であると言える。

第7章では、本稿の提案から、「も」のさらに周辺的な用法の統語論的な現象を観察している。「明日にも」といったもっとも早い時期を表す「も」は「に」の削除が許されないこと、「も」によって早さのスケールが想定されることからP主要部に直接付加する極限の「も」の一種であることを示している。また、「一日一食ならお腹も空くだらう」といった当たり前の「も」は、CPの指定部に位置し、前件から生じる他の可能性を想定することからC類ぼかしの「も」に類似した「も」であることを明らかにしている。

第8章では、本論文における主張をまとめ、今後の展望を述べている。本論文における分析から、「も」には不定語と結びつく[Q]素性、とりたて対象と結びつく[+FOCUS/+LINK]素性をもつことを主張し、「も」の多様な用法への派生過程を示している。まず「も」は、付加対象が主要部であるか最大投射であるかによって大別される。数量表現の一部である類別詞CLに付加するものが数量表現+「も」であり、他の主要部に付加し、そのうち[Q]素性の照合が行われるものが不定語+「も」、行われないものがA類ぼかしの「も」となる。また、付加対象が最大投射である「も」のうち、「も」をもつ句がTPの指定部に生起するときはB類ぼかしの「も」、ForcePの指定部に生起するときはC類ぼかしの「も」となり、それぞれ主要部にある[+FOCUS/+LINK]素性と指定部・主要部の一致が生じる。累加の「も」は、最大投射に付加し、文中要素と[+FOCUS]素性の一致が生じる。また、否定呼応表現は、「誰」「何」といった不定語との併合の後に[Q]素性が照合され、NegPの主要部によって[+FOCUS]素性の照合が生じる。

本論文における議論から、情報構成にかかわる素性の一致が狭義の統語論（Narrow Syntax）で生じ、語用論における計算に必要な単位をつくるということが示された。今後、助詞や日本語に限らず様々な言語の体系化を通して、統語論と意味論、語用論のインターフェースが明らかになることが望まれる。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 榎原 実香 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	由本 陽子
	副 査	准教授	越智 正男
	副 査	教授	宮本 陽一

## 論文審査の結果の要旨

榎原実香氏の博士学位申請論文「「も」の多様性に関する統語論的研究」は、多様な用法をもつ日本語の「も」の意味機能と統語的振る舞いを生成文法の統語論によって体系的に説明し、「も」が統一的に捉えられることを示そうとしたものである。

第1章では、日本語学における「も」についての記述的研究を概観し、研究者によって様々な分類・呼称が与えられている意味機能を整理している。基本的な機能を「累加」だとしながら、とりたてた語が極限值であることを示す「極限の「も」」(e.g. {3人も／どの学生も} 試験に落ちた)と、とりたてた語と同類の事物が具体的に想起されない「ぼかしの「も」」(e.g. 白鵬も負けるんだねえ)は区別して扱うべきことを示している。

第2章では、多様な用法における「も」の統語的特徴を沼田(2009)の観察を出発点に再考している。生成文法的な手法により、「も」の統語的特徴は、結合する対象(主要部か最大投射か)、生起する階層上の位置、文中のどのような要素との一致が見られるか、また、そのことと関連して、削除現象においてどのようなふるまいを見せるか、という観点から考察すべきであると述べている。

第3章では、第2章で見たいくつかの統語現象に照らして、それぞれの用法の「も」が生成文法の統語構造上どの位置に生起するかが明らかにされている。南(1974, 1993)が提案する日本語学における階層構造と、生成文法のカートグラフィによる分裂CP構造とを対応させながら、日本語学の先行研究からの知見を生成文法による分析に活かそうとしている。前者の階層構造上では最下位のAの階層に生起すると考えられる不定語や数量表現と結合した「も」と「累加の「も」」は $\nu$ P内に生起するものと考えられている。一方で、「ぼかしの「も」」には、 $\nu$ P内、FinP指定部、ForceP指定部に生起するものの3種類が区別されると主張している。

第4章では、生成文法における一致現象の観点から、第3章で分類した各「も」の特徴が明らかにされている。項削除、助詞残留において削除される要素については、LFコピー分析が援用されている。素性の一致には2種類が想定されており、一つは、「誰をたたいた子供も叱った」のような文において全称解釈を導くもので、主要部についての「も」の[iQ]素性と不定語の[uQ]素性の局所的な一致である。もう一つは、「累加の「も」」、「ぼかしの「も」」の解釈においてとりたてについての語用論的計算対象を決定するための一致で、「も」の生起する階層によって[+FOCUS]または[+LINK]素性が想定されており、これらに指定部・主要部の一致が生じると主張している。

第5章では、「も」の意味機能が「も」の作用域の違いによっても区別されることを明らかにしている。「も」の作用域が、第3、第4章で示された統語構造上の生起位置や付加した要素の投射レベルと素性の一致とによって決定されるという仮定のもとで、各用法における「も」の作用域と意味機能の違いとを説明している。具体的には、「累加の「も」」においては、作用域が任意的に拡張できるのに対して、「極限の「も」」では焦点の拡張が不可であること、また、「ぼかしの「も」」については、その生起位置によって、焦点の拡張範囲が異なることが多様な意味機能を導いていると説明されている。

第6章では、「ぼかしの「も」」のうち、ForcePの指定部につくものが文末形式と呼応する現象と、否定呼応表現としての「誰も／何も」などの振る舞いが、いずれも情報構成に関わる素性の一致現象と見なせるとして、両者を統一的に分析することが主張されている。その共通点とは、結合対象に制限が少ないこと、限定された階層における主要部との呼応を要すること、さらに、どちらも「が」を付加すると特定の機能が現れなくなることである。

第7章では、第6章まででは扱ってこなかった周辺的な用法の「も」についても、本論文が提案する分析によって、その統語的ふるまいが説明できる可能性が示され、本論文の分析が「も」を統一的に捉えようとする目的に叶うものであることが示唆されている。

第8章では、まとめと今後の展望について述べられている。本論文が示した分析では、情報構成にかかわる素性の一致が狭義の統語部門(Narrow Syntax)で生じ、語用論における計算に必要な単位をつくることが提案されており、統語論と意味論・語用論のインターフェイスを明らかにすることに貢献するものになると述べている。

本論文は、日本語学における「も」についての様々な観察や知見を丁寧に吟味したうえで、「も」の多様な意味機能と前提や含意などの語用論的な意味とを生成文法の枠組みで分析し、統一的なメカニズムで説明できることを示そうとした意欲的な研究の成果である。あくまでも「も」には1種類しかなく、その生起位置と素性の一致の有無及びその性質の違いによって多様性が説明されるというのが、榎原氏の主張点であり、一見統一的な説明に到達できているように見えるが、①結合対象が主要部と最大投射のいずれか、②素性の一致が義務的なものかどうか、③一致現象によって従来の統語的認可がおこるのか、それとも情報構成にかかわる解釈が導かれるのか、といった、本質的に異なる性質が各「も」に付与されており、真に統一的な説明になっているのかという疑問が残る。また、カートグラフィ－仮説と情報構造の構成とのインターフェイスとの両方を組み込んだ統語論を用いているため、意味論と語用論の線引きをどこで行うのかという難しい問題に直面せざるを得ない部分があり、分析に用いている様々な仮説や操作が本当に整合性をもって機能するのか、理論的に精査していく必要がある。

しかしながら、以上のような問題は、本論文が理論的に見て非常に挑戦的な目的に取り組んでいることによるものであり、提案されている分析は生成文法理論だけでなく日本語学、日本語教育にも少なからず貢献をするものには間違いない。以上のことから、本論文を博士(言語文化学)の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。